

2023年7月9日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

詩編 51 : 18~19

マルコによる福音書 2 : 17

「主の食卓に来るべき人」

(ハイデルベルク信仰問答 問 81~82) ※問答は「日々の祈り」をご覧ください。

【招詞】申命記 6 : 4~5

【讚美歌】 24 「たたえよ、主の民」

【詩編交読】 詩編 6 編

【赦しの宣言】 イザヤ書 55 : 7 「主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。

わたしたちの神に立ち帰るならば／豊かに赦してくださる。」

【讚美歌】 6 「つくりぬしを賛美します」

【祈祷】

【聖書】 詩編 51 : 18~19、マルコによる福音書 2 : 17

【説教】 「主の食卓に来るべき人」

< 聖餐にあずかるふさわしさ？ >

主の日の礼拝では、『ハイデルベルク信仰問答』から、聖書の御言葉を聞いています。今はちょうど「聖餐」についての問答のところですよ。

聖餐は、イエスさまの救いを信じる信仰をもって、聖霊のお働きの内に与ります。

聖餐は、イエスさまの十字架と復活による救いの恵みを信じて、信仰を告白し、洗礼を受けた者が、一生涯にわたって、教会において与り続けるものです。

これは、聖書の御言葉の説教と共に、わたしたちが与えられた信仰の日々を生きていくための、無くてはならない、欠かすことの出来ない、恵みの食卓なのです。

聖餐では、パンと杯という、目に見える「しるし」が用いられます。

この目に見えるしるしを通して、わたしたちは、自分たちが頂いている、目には見えない、イエスさまの十字架と復活による救いの恵みを、確かなものとして受け取ります。

こうして聖餐に与る度に、わたしたちは、イエスさまの十字架の死による、罪の赦しを確かにされ、与えられた永遠の命に養われ、イエスさまと一つに結ばれていることを確信させられて、信仰を励まされつつ、強められつつ、歩んでいくことが出来るのです。

聖餐は、信仰の歩みが弱々しいわたしたちのために、イエスさまご自身が定めてくださったものです。ですから、いつも、そのイエスさまの御言葉が聖餐の中心にあり、執行される時には、「聖餐制定の御言葉」が、必ず朗読されます。

わたしたちの教会では、コリントの信徒への手紙一 11 : 23~29 が読まれます。一度、いつも聖餐の時に読まれる部分を、すべて読んでみます。お聞きください。

「わたしがあなたがたに伝えたことは、わたし自身、主から受けたものです。すなわち、主イエスは、引き渡される夜、パンを取り、感謝の祈りをささげてそれを裂き、『これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい』と言われました。また、食事の後で、杯も同じようにして、『この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい』と言われました。だから、あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです。」

…そして、ここで終わりではありません。この後に続く御言葉に、実は、少しドキッとしたことがある、という方がおられるかも知れません。ドキッとしたことがなかったら、それはそれで、改めてその御言葉の意味を深く考えてみて頂きたいと思います…。

聖餐制定の御言葉は、こう続きます。「従って、ふさわしくないままで主のパンを食べたり、その杯を飲んだりする者は、主の体と血に対して罪を犯すことになります。だれでも、自分をよく確かめたうえで、そのパンを食べ、その杯から飲むべきです。主の体のことをわきまえずに飲み食いする者は、自分自身に対する裁きを飲み食いしているのです。」

ここでは、ふさわしくない者は、聖餐に与るべきではない、と語られています。だから、自分のことをよく確かめたうえで、パンを食べ、杯を飲むべきであると。

しかも、主の体のことをわきまえずに飲み食いする者は、自分自身に対する裁きを飲み食いしているのです、とあります。とても厳しい御言葉です。

聖餐に与るふさわしさ。それは一体、何なのでしょう。このことを考えると、わたしたちは、不安になってしまうかも知れません。

わたしは、主の食卓にふさわしい者でしょうか。これまでの日々の歩みは、信仰者として合格だったのでしょうか。この主の食卓に与る資格が、わたしにはあるのでしょうか。

ふさわしいかどうか、自分のことをよく確かめなさい。そう聞くと、わたしたちは、自分の罪深さを思わずにはられません。

御言葉を聞かず、祈ること少なかったこと。与えられたものに感謝しなかったこと。自分のことばかり考えて、神さまの望まれる歩みをしなかったこと。隣人を傷つけたこと。隣人を赦さなかったこと。弱く、小さくされている人と、関わろうとしなかったり、疎ましく思ったりしたこと。悪い言葉を使ったこと。良くない思いに心が支配されたこと。

自分の罪を顧みれば、いくつでも挙げる事ができてしまうのです。

<主に頼るしかないわたしたち>

わたしたちは、「ふさわしさ」ということを考える時、まず、自分自身が、神さまの御心に適う歩みが出来たかどうか、ということをおもうのではないのでしょうか。

もちろん、そのような歩みが出来るに越したことはありません。

でも、反対にわたしたちが、「今週は、神さまの御心に完全に従って、クリスチャンとして素晴らしい歩みが出来た！」と、そんな自己評価が出来る日が来るのでしょうか。「清く正しい、愛に満ちた歩みが出来た。今日のわたしこそ、イエスさまの御前に堂々と出て、恵みの食卓に与るにふさわしい！」そんな風に思えることが、果たしてあるのでしょうか。

それは絶対にありません。わたしたちは、地上を歩んでいる限り、完全になどなれないのです。わたしたちが、そのような「ふさわしさ」を基準とするなら、わたしたちは生涯、聖餐に与ることは出来なんでしょう。

わたしたちは、最後の最後まで、罪と戦い、悪の誘惑に抵抗し、この世の力に忍耐し、自分の弱さと戦い続けなければなりません。

でも、だからこそ、です。だからこそ、わたしたちは、神の御子イエスさまの十字架による罪の赦しを、繰り返し覚えなければならないのです。

このような罪深い現実であるにも関わらず、自分は確かに、罪を赦されている者であると。その恵みを確かにされるために、イエスさまの十字架を、いつも、繰り返し、見つめなければならないのです。この方の十字架に頼り、罪を赦された者として立つことによってしか、わたしたちは前に歩めないのです。

そもそも、始めからわたしたちは、自分で自分を救うことが出来ない、自分を正しく導くことも出来ない、自分の罪に対して、まったく何も出来ない、無力な罪人でした。ただ罪によって、神さまを見失い、隣人を傷つけ、滅びに向かっていくしかありませんでした。

それでも、わたしたちをお造りになった神さまが、そのようなわたしたちであっても、愛して下さり、憐れんで下さり、わたしたちが罪によって、神さまから離れ、悲惨の中で、滅びていくことを良しとされなかったのです。

ですから、ご自分の御子イエスさまを、わたしたちの救い主として遣わし、この方に、わたしたちの罪の苦しみをすべて背負わせられたのです。

神の御子イエスさまが、わたしの罪をすべて背負い、わたしの代わりに罪の裁きを受け、わたしの代わりに「神に見捨てられた」と苦しみ叫んで、十字架の上で肉を裂かれ、血を流して死んで下さいました。

イエスさまが、わたしのすべてを。弱さも、罪も、裁きも、死も、滅びも、この方がすべてを引き取って下さったのです。

そして、十字架の死から復活なされたイエスさまは、わたしたちに、罪の赦しと、永遠の命と、復活の約束と、神の子の身分と、ありとあらゆるご自分の恵みを、すべて与えて下さいました。

わたしたちは、そのイエスさまの恵みを、感謝して受け取り、信仰を告白し、洗礼を受けて、「あなたの罪は赦された」との宣言を、はっきりと聞いたのです。

…確かに、もう罪の赦しを頂いているはずなのに、未だ、わたしたちの現実には、罪の残骸が纏わりついており、わたしたちは相変わらず弱く、愚かなことを繰り返しています。

しかし、以前とまったく違うのは、わたしたちが、イエスさまのものである、ということです。イエスさまが、わたしのすべてを背負って下さっています。すべてに勝利なさった神の御子が、わたしたちのよすがであり、砦であり、最強の保護者、弁護者なのです。

わたしたちは、常に、このイエスさまの御許に身を寄せている必要があります。この方なくしては生きられないのです。

それなのに、わたしたちは弱さのゆえに、そのようなことさえ忘れてしまう。

そうして、ある時は、まるでイエスさまがおられなくても、平気なつもりになったり。またある時は、まるでまだ救われていないかのように、罪に打ちのめされているのです。

だからこそ、わたしたちには、聖餐の食卓が与えられました。聖餐に与る度に、わたしたちは、自分がイエスさまと一つに結ばれていること。イエスさまのすべてが、わたしのものとされていること。そして、このわたしが、イエスさまのものであること。その確信を、新たに、確かに、されるのです。

<悔い改める者>

ですから、聖餐にふさわしい者とは、自分が、イエスさまに頼らなければ生きることの出来ない罪人である、ということ、深く知っている者である、ということなのです。

そして、イエスさまの十字架にこそ、自分の罪の赦しがある、命がある、救いがある、希望があると、心から信じてより頼む者です。

そうであるならば、イエスさまの十字架によって裂かれた体、流された血を覚えてあずかる聖餐から、自分が罪深いからと言って、どうして身を引くことが出来るのでしょうか。

むしろ、聖餐の恵みは、罪深いわたしたちが、どうしようもない弱さを強められるため。恵みを忘れやすいわたしたちが、救いの確信をいただくため。そして、自分が確かにイエスさまのものとされていると、確信を与えられるために、喉から手が出るほどに、縋りつくように、どうしても与りたいものであるはずなのです。

「罪深い歩みをしたから、わたしは聖餐に与るのにふさわしくないかも知れない。」

そう思う、罪の自覚と、悔い改めの心は、とても大切なことであり、わたしたちがいつも見つめていなければならないものです。

でも、だから、主の食卓にふさわしくないのではなくて。むしろ、そのような者のためにこそ、悔い改める罪人のためにこそ、主の食卓は備えられている。そのような者をこそ、イエスさまは招いて下さっている。

そのことを、胸に刻まなければならないのです。

今日の『ハイデルベルク信仰問答』の問 81 には、その聖餐に与る人の「ふさわしさ」について、このように表現されていました。

「問 81 どのような人が、主の食卓に来るべきですか。」

「答 自分の罪のために自己嫌悪しながらも、キリストの苦難と死によってそれらが赦され、残る弱さも覆われることをなおも信じ、さらにまた、よりいっそう自分の信仰が強められ、自分の生活が正されることを、切に求める人たちです。」

そして、続きに、「しかし、悔い改めない者や偽善者たちは、自分自身に対する裁きを飲み食いしているのです」とあります。

つまり、罪の悔い改めの心なくして、自分は清く正しい者であると思って、堂々と聖餐の食卓に着いたり。あるいは、十字架のイエスさまの御前で、自分の正しさを誇るようなことがあるならば。それこそ、イエスさまの十字架の苦しみと死を蔑ろにしていることであり、差し出された恵みを投げ捨てることであり、主の食卓にふさわしくないことなのです。

そして、次の問 82 には、こう続きます。「それでは、その信仰告白と生活によって 不信仰と背信とを示している人々でも、この晩餐にあずかれるのですか。」

「答 いいえ。なぜなら、それによって神の契約を侮辱し、御怒りを全会衆に招くことになるからです。それゆえ、キリストの教会は キリストとその使徒たちとの定めに従って、そのような人々をその生活が正されるまで、鍵の務めによって締め出す責任があります。」

ここには、信仰告白と生活によって、不信仰と背信を示している人々は、この主の晩餐に与ることができない、ということ。そして、キリストの教会は、その人々の生活が正されるまで、鍵の務めによって締め出す責任がある、としています。

大変厳しい書かれ方をしていますが、これは、信仰問答が書かれた宗教改革の初期に、聖餐についての聖書から離れた、誤った教えや、また、そのような態度によって、イエスさまの十字架の恵みを損ねるようなことを、徹底的に取り除くためになされました。

もし教会が、イエスさまの十字架の死を軽んじるようなことや、その恵みを無駄にしてしまうような教えや行いを許すなら。それは、聖礼典である聖餐そのものを歪めることになり、教会に召し集められた者たちが、イエスさまの体として、まことに養われ、強められていくことが出来なくなってしまいます。

ですから教会は、今でも、聖礼典を正しく守り、教会を健やかに立ててゆくために。会衆が、まことの信仰をもって、生かされ、強められ、成長させられていくために。御言葉に従って、必要があれば、厳しい対処も行うことを示しているのです。

<罪人が招かれている>

わたしたちは、御言葉によって、イエスさまの十字架の死による、罪の赦しを知らされました。そして、その罪の赦しを知って、初めて自分の本当の罪深さを知らされました。

それは、わたしの罪は、その罪を償うために、神の御子が、十字架で苦しんで死ななければならないほどの罪であった、ということです。神さまに背くこと、神さまに従わず、自分の思いに従って歩むことは、それほど重い罪なのです。

しかし、またそれは、神さまが、ご自分の御子に、わたしたちの罪を着せてまでも、わたしたちを赦し、新しい命を与え、共に生きることを望んで下さった、ということです。

その、父なる神さまの、わたしたちに対する計り知れない愛をも、イエスさまの十字架は教えて下さいます。

聖餐の食卓は、このイエスさまの十字架の死と、そのすべての恵みを指し示すものです。

ですから、この食卓にふさわしいのは、自分が、イエスさまの十字架によってしか救われることのできなかつた、悲惨な罪人であったことを覚える者であり。またこれからも、イエスさまの十字架により頼み続けなければならないと知っている者こそが、ふさわしいのです。

そして、そのような、イエスさまに頼らざるを得ない、弱い、無力な罪人をこそ、イエスさまは、御自分の食卓に招いておられるのです。

今日のマルコによる福音書 2：17 は、イエスさまの御言葉です。

この時イエスさまは、徴税人や罪人たちと一緒に食事をしておられました。徴税人や罪人とは、当時、神さまの救いに与れないと思われていた人々です。当時、誰かと一緒に食事することは、仲間であり、親しい友であることの「しるし」でした。ですから、イエスさまが罪人の仲間として、彼らと一緒に食事をしているのを見て、ファリサイ派の律法学者たちが非難したのです。

それに対して、イエスさまはこう言われました。「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」。

イエスさまは、丈夫な人は医者が必要としていない。病を癒し、苦しみを取り去ってもらうために医者が必要としているのは、病人である、と仰いました。

同じように、イエスさまは、正しい人のためではなく、神さまから離れてしまった罪人たち、そこから生じる、様々な苦しみ、悲惨、絶望の中にある者たちを、癒し、慰め、救い出すために来られました。

医者が必要としているのは、病人です。救い主が必要としているのは、罪人です。

だからイエスさまは、罪人の許にこそ来て下さり、彼らを御自分の食卓に招かれたのです。

すべての者が、イエスさまの食卓に招かれています。すべての者が、神さまに従うことの出来ない「罪人」だからです。

「正しい人」は一人もいません。当時のファリサイ派のように、自分が「正しい」と思っている人はいます。彼らは自分を誇りに思い、また自分の正しさで、他の人々を裁いています。彼らもまた、神さまを見つめずに自分を見つめている、「罪人」なのです。

イエスさまは、罪人を招くために来られました。わたしたちを招くために来られました。

そして、わたしたちがお招きにお応えするとは、このイエスさまが、ご自分の命をかけて差し出して下さった、十字架による救いの恵みを、心から感謝して受け取り、自分の罪を知り、悔い改めて、洗礼を受けるということなのです。

そうして、わたしたちは、イエスさまの、主の食卓に連なるのです。

わたしたちが席に着くことを、イエスさまは心から喜んで下さいます。そして、わたしたちのために、食事を整え、仕えて下さり、溢れるほど豊かに満たし続けて下さるのです。

日々、どうしようもない罪に、弱さに苦しむわたしたちが、このイエスさまとの親しい交わりに与る恵みの食卓に招かれているのに、罪の赦しを確かなものとされる主の食卓に招かれているのに、どうしてそれに与らずにいられるのでしょうか。

わたしたちは、深い悔い改めの心と、感謝をもって、この食事に心から喜んで与っていきたいのです。

そこで、わたしたちはまた、救いの恵みを新たにされて、信仰を強められて、罪の赦しの確信を得て、天を見上げて、歩み出していくことが出来るのです。

【お祈り】

天の父なる神さま 御名をほめたたえます。

イエスさまが、罪人のわたしたちのために、十字架に架かって下さり、ただ恵みによって、わたしたちに罪の赦しと、永遠の命を与えて下さったことを、感謝いたします。

そして、この救いの恵みを受け取るようにと、洗礼へと招いてくださり、また、わたしたちの信仰をいつも新しく、力強く、養って下さるために、恵みの主の食卓へ招いて下さることを感謝いたします。

わたしたちが、深い悔い改めと、心からの感謝をもって、お招きに応えることが出来ますように。そして、まことにふさわしく、主の食卓に与ることが出来ますように。

イエスさまの十字架の苦しみと死に、わたしの救いのすべてがあることを深く覚えて、これからもその恵みによって、赦しのうちに、生かされることが出来ますように。

このお祈りを、救い主イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讚美歌】 77 「パンくずさえ拾うにも」

【信仰告白】 ニカイア信条

【十戒】

【献金】 65-1 「今そなえる」

【主の祈り】

【祈祷】

【讚美歌】 29 「天のみ民も」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン